

農作物技術情報 第1号 畜産

発行日 2020年 3月 19日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://i-agri.net/Index/gate002>」

◆暖冬少雪の影響で、牧草の萌芽、生育が始まっている地域があります。1番草の収量を確保するために、早めの追肥作業を行いましょう。

牧草

（1）早春に施肥をする重要性

イネ科牧草は、生育期間中で1番草の時期に最も旺盛に成長し（スプリングフラッシュ）、生産量が最も多い時期です。年間収量でみると1番草は年間収量の4～5割を占めます（図1）。

スプリングフラッシュは、牧草の出穂という生殖成長によるもので、越冬したイネ科牧草の茎は出穂のための条件が整っていて、栄養分が十分にある場合は、この現象を起こします。出穂するかどうかは、肥料成分、特に窒素で決まります。

春早くから窒素を十分に吸収していれば、順調に出穂すると考えられます。出穂茎は、穂を支えるために茎が丈夫に育つので、穂のない茎よりも重さが6～7倍になると言われています。

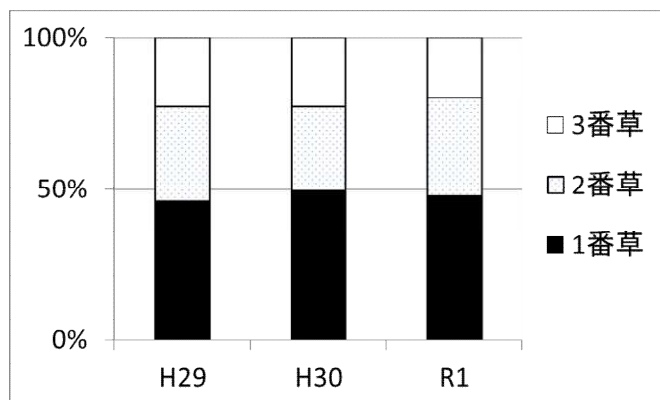


図1 年間収量に各番草が占める割合
各普及センターの生育診断圃の平均値より算出した

（2）早春施肥

牧草は平均気温5度から生育を開始します。今冬は積雪期間も短かったため萌芽（緑化の始まり）も早まっていると考えられます。イネ科牧草の刈取り適期は出穂期前後ぐらいとされますが、出穂期は萌芽期からの気温と日照時間で決まります。施肥時期を遅らせても出穂期を遅らせる効果は期待できません。

したがって、草地を見回り萌芽を確認し、圃場にトラクタが入れるようになったら、ただちに施肥を行うことが重要です。春の施肥遅れは、遅れた分だけ牧草の生長が妨げられることから、一番草の減収に直結します。

早春の施肥は、速効性のある化学肥料を中心に行います。また、この時期の堆肥やスラリーの大量散布は、収穫までに分解が十分に進まず集草時に混入しやすいこと、さらに牧草中のカリやタンパク含量が高まることで、グラスサイレージの発酵品質低下を招きやすいので避けましょう。

維持管理草地の施肥目安は、表1のとおりです。

表1 牧草地の施肥基準（維持草地）

区分	草地種類	施肥時期	10aあたり施肥量(kg)		
			窒素	リン酸	カリウム
採草地	オーチャード グラス主体	早春	10	5	10
		刈取後（最終刈後除く）	5	2.5	5
	チモシー 主体	早春	10（*5）	5	10
		刈取後（最終刈後除く）	5	2.5	5
放牧地		早春(牧草ほう芽期)	6	3	3
		夏期（7月）	6	3	3
	スプリング フラッシュ抑制	初夏(6月中旬)	6	3	3
		夏期(8月上旬)	6	3	3

「岩手県牧草・飼料作物生産利用指針」より

* チモシー主体草地の利用初年度の窒素の施肥量は、倒伏防止の観点から、5kg/10a程度に抑える

次号は4月23日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

農業普及技術課農業革新支援担当は、地域農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。